

母の故郷に見る鉄の跡



母生家の家紋(剣花菱)

福岡県八女郡立花町大字^{たにがわ}谷川は、母が生まれ育った里です。その生家の近くには行基が彫ったとされる仁王像のある^{こくせんじ}谷川寺があり、今も寺にまつわる地名が残っています。例えば、生家の後ろには、「仁王堀」と呼ばれた湧水池が最近まであって、そこで行基が原木を浮かべて仁王を彫ったと云う言い伝えがあります。又、生家の裏山は「毘沙門」、前の道は^{はなつきば}「花付場」と呼ばれていましたし、「阿弥陀堂」「四方堂」の名前も残っています。さて、その谷川周辺は、寺にまつわる地名だけでなく、不思議と鉄や金属にまつわる事柄も多い土地柄です。家の前の田んぼは^{こがね}「黄金屋敷」との呼び名が残っていますし、谷川の隣の集落は「^{たたら}多々良」の字地名があり、その多々良は“^{たたら}踏鞴”につながります。そうした地名は、過去に何かの理由があってその呼び名が生まれ、今に至るまで言い伝えられてきたと思われませんが、その由縁は何に求められるのでしょうか。

八女郡立花町大字谷川字湯の浦に神社があります。この神社は、谷川及び多々良地区の“^{じしゅ}氏神”で、地主神社と阿蘇神社の二つの神社と一緒に祀られている珍しい神社です。ちなみに、神社に立てられている由緒書には、地主神社の祭神は、^{おおくにぬしのみこと}大国主命、^{あめのこやねのみこと}天兒屋根命、^{うわづつのみこと}表筒男命 & ^{なかづつのみこと}中筒男命 & ^{そこづつのみこと}底筒男命とありますが、創建年代については書かれておらず、いつ頃建てられたかの記載はありません。その神社は、8世紀に行基が建



立したと伝えられる^{こくせんじ}谷川寺とは、道路をはさみ反対側の丘の上に建っており、昔からその場所にあったのではなく、以前はすぐ北側の山にあったと伝えられています。

まず、谷川・地主神社の祭神について見てみますと、大国主命とは言えば、京都清水の“^{じしゅ}地主神社”の祭神であり、天兒屋根命は、京都の“春日神社”の祭神で、表筒男命&中筒男命&底筒男命については“住吉神社”の祭神です。とすれば、その昔、土地の人々が京都の有名な神様を任意に奉斎したと言えなくも無いのですが、しかし、一般には、谷川を拓いた人が、自分の祖先や繋がりのある人を奉ったとする考えの方が自然です。

もしそうであるなら、天兒屋根命と表筒男命&中筒男命&底筒男命は、鉄にゆかりの深い神様です。何故なら、天兒屋根命については、谷川健一氏は『鍛冶屋の母』で、その神を鉄山師が信仰した神様と述べていますし、表筒男命&中筒男命&底筒男命は、『日本の地名』の中で、“^{つづ}筒(神)”が^{いかづち}雷で、雷(神)は劍(神)・蛇(神)につながり、又、海神にもつながる事を述べており、その神々は鉄にかかわる神様です。もう一つの阿蘇神社については、阿蘇山の北に在る、肥後一の宮の社格を持つ古くから有る阿蘇神社の分祀として奉られた神社です。阿蘇神社の祭神は、^{たけいわたつのみこと}健磐竜命と^{あそひめ}阿蘇比咩神と^{くにのみやつこ}国造神の3神で、その分祀を、いつ頃に谷川に奉斎したと思われませんが、谷川・阿蘇神社には由緒書が無く、詳しい事は分かりません。が、谷川氏は阿蘇神社の“阿蘇”について、阿蘇の“ソ”は『朝鮮語で鉄を意味するサ又はソに由来する語』（『日本の地名』）としており、とするなら阿蘇神社も鉄に纏わる神社です。

さて、谷川の北側には矢部川が流れており、それを更に北に向かうとなだらかな丘陵を越えて星野川(写真右)が流れています。星野川を挟んで、更に北側に、又、丘陵がありますが、そこに^{どうなんざん}童男山古墳があります。その古墳群は27基が確認されており、その地名は八女市^{やまうち}山内です。



その1号古墳からの出土品は、江戸時代には既に開口していたという事で、残念ながら残されていませんが、その他の古墳から出た鉄鏃や太刀柄頭や^{よろい}鎧片などから、6世紀後半に作られたと見られています。

その古墳がある丘陵を登ってみると、山肌がとても赤いことに気付きます。右写真は、1号墳を写したのですが、写真からも解るように周り是一面、赤い土で覆われており、おそらくベンガラになる土です。右下写真は古墳内部を写したもので、横穴式石室の横柱に塗られている赤い色はその丘陵で採れたベンガラです。そして、古墳の近くに落ちていた石の表面にはベンガラのくすんだ赤系統の色では無く、もっと明るく鮮やかな赤色が付着しており、朱とも思われる色合いです。

さて、古墳の主は、たまたまその地に住んでいたのも、そこに墓を作ったと考えられますが、墓にベンガラ/朱が塗ってある事は、ベンガラ/朱を貴んだが故に墓をその地にわざわざ作ったとも考えられます。であるなら、何故に、ベンガラ/朱を貴んだのでしょうか。

ベンガラは酸化鉄(Fe_2O_3)の赤色顔料で、旧石器時代から使われており、フランスのラスコーやスペインのアルタミラの動物の壁画はおおよそ1万5千年前頃にベンガラで描かれている事で有名です。日本では、縄文前期(6千年前)には漆にそのベンガラを入れて塗った土器や櫛が見つかっていますので、人類は古くから、その赤い土を利用して知事を知ることができます。赤錆色のベンガラは、古代の日本では、“赭”^{ほそ} 或いは“(鉄)丹”^{たん}と呼ばれ、朱や鉛丹と共に、赤色の顔料として珍重されました。

(ちなみに、『魏志倭人伝』には、卑弥呼が率いる邪馬台国を述べた項に『其山有丹』とあり、支配地内に丹が採れた事が書かれています。この丹は「本草備要」を見るまでもなく、中国語の意味は、辰砂(珠砂)、すなわち、水銀朱を指すと理解するのが妥当と思われます。)

尚、ベンガラの用途としては、赤色の着色剤、或いは、顔に塗る顔料としてだけでなく、建物や容器等に塗れば耐候性と防腐性が得られる特性がありました。

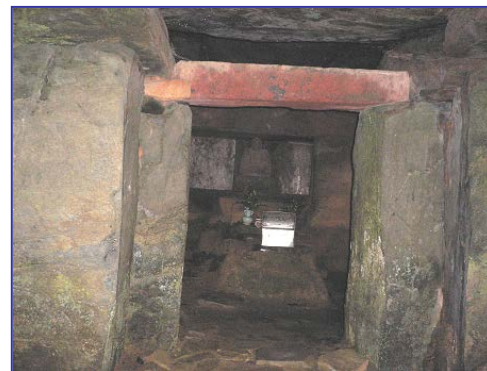
しかし、ベンガラが、顔に塗ったり、或いは、赤漆にして使うと云った顔料の用途が主であったのであれば、身近に在る“赭”^{ほそ}を採って来て、“精製”して利用すればよかつた訳ですから、それほど貴重で重要なものでは無かつたはずで、しかし、童男山古墳の主達が何代かに渡って、丘陵の上に大きな墓を作り得たのは、何らかの財力と権力の基盤があつてこそ、出来得た事です。

そうです。ベンガラは顔料としてだけ無く、何かの特別な原材料だったので。

ベンガラは酸化鉄だと言うのですから、それ自体は鉄です。では、その酸化鉄が“鉄”の原料となり、使われたとすればどうでしょうか。そう考えれば、古墳の主がりっぱな古墳を作りえた理由が理解出来なくもありません。しかし、見ても解るとおり、ベンガラ土は所詮“ベンガラ土”で、砂鉄であれば炉で高温燃焼すると鉄になりますが、ベンガラ土自体は、ただ単に焼いても鉄



1号墳と赤い土(上)と古墳の内部(下)



石室に塗られた朱

にはなりません。

八女市が発行する小冊子の中に、『童男山古墳周辺の動植物たち』があります。それを開くと、その中に、『星野川』の欄があり、そこには『星野川は川床部に広い岩盤をもち、砂礫地はツルヨシが繁茂するヨシ原となっています。、、、』とあります。

とすれば、以下は想像でしかありませんが、真弓常忠氏の著述(『古代の鉄と神々』)の指摘に、「葦原で鈴の形で得られる褐鉄鉱なら 700-800 度の熱で鍛造出来るので、砂鉄以外にも、この方法で鉄が出来た」とありますから、その延長で考えるなら、その童男山の丘陵から流れ出たベンガラ(酸化第 2 鉄)が、星野川に生育する^{よし}葦の根に根粒バクテリアの組成作用により鉄分が固定され、“壺石”になる可能性は大いにありうる事です。そして、当時の人が、その壺石である“褐鉄鉱”の存在を知り、それを利用して鉄を作ったと推測すると、童男山古墳の一族の繁栄が理解出来ます。6 世紀の古墳時代には、既に、踏鞴を使った鉄の製造が日本で広く行き渡っており、童男山の山内地区で、鉄の製造が行われたとする想定は有り得ない事ではありません。

ちなみに、“^{さんない}山内”と云う地名は“たたら(踏鞴)”にまつわる名で、“たたら”集団が家族と共に居住していた場所を“^{さんない}山内”と呼びました。そうした“山内”と“^{たたら}たたら”が結びつく所として、島根県吉田村山内の「菅谷たたら」が有名です。但し、菅谷たたらは、鎌倉時代以降の 12-13 世紀頃から始まったと見なされており、童男山の 6 世紀後半とは、ざーと 600 年は違いますし、八女の“山内”は“やまうち”で“さんない”ではありませんので、踏鞴と結びつく“^{さんない}山内”と、直ちに結びつけて考えには飛躍がありすぎます。が、しかし、八女に“山内”と云う地名が有るのは、鉄に纏わる事柄があった故かも知れません。

さて、八女は、ベンガラの里と呼んでもおかしくない程に、どこかしこでベンガラ土を確認出来る土地です。

例えば、立花町隣の八女市岡山には熊野神社がありますが(右写真)、その熊野神社もベンガラ土の上に建てられていますし、鶴田の丘陵でもベンガラ土を見る事が出来ます。ベンガラ土は色が赤茶色ですから、ちょっと注意して見ているとその色が目に飛び込んでくるので、崖や切り通し、或いは、崩れた山肌等があれば、割りと簡単にわかります。



その熊野神社がある岡山に隣接する西山ノ上遺跡で、弥生時代後期の鍛冶関連遺跡や環濠が最近発掘されています。2003 年 4 月から 2004 年 3 月までの発掘結果による説明資料によれば、そこで井戸跡や稲の株跡が遺跡で見つかっており、その遺跡は、縄文から弥生時代を経て中世まで続いた遺跡とあります。と云う事は、ここ八女地区で 2000 年前頃の弥生時代に鉄を鍛冶していた跡が確認された事になります。

とすれば、ベンガラ土が鉄の原料と結びつくとする推測も、あながち的外れでは無いかもしれません。

その岡山から北東に 3km も離れていない所に(従って岩戸山古墳からは北西に 1km の所ですが)、広川町 ^{おおた}太田 という地名があり、そこは ^{おほた}太田 郷が拓かれた所です。谷川健一氏は『青銅の神と足跡』の中で、是沢恭三氏の研究を挙げ、大田/太田の地名が渡来人に関係が深い事、近くに鉱山をひかえているケースがはなはだ多い事等を転記しています。その“太田”と広川町の

太田に関連あるのかどうかは実際に調べてみないと解りませんが、興味深い指摘です。ちなみに、いつの時代とは書かれていませんが、吉田東伍氏の『地名辞書』には太田の近くの^{はいんづか}羽大塚で石炭が採れたと書かれています。

しかし、弥生時代の鉄については、“鍛冶”が行われた事実は認められるにしても、鉄の“製錬”が行われた事については、これまでの歴史学では否定的です。

例えば、田中琢氏は『倭人争乱(日本の歴史 2)』の中で、『弥生時代、日本列島には、鉾石や砂鉄から鉄を精錬したことをしめすはっきりした証拠はない。発見されている鉄の精錬の遺跡は6世紀以降のもの。そこで注目されるのが、「三国志」の「魏書」「東夷伝」のなかにある記事だ。「東夷伝」は「魏書」の最後の部分を占め、そのまた最後に有名な「魏志倭人伝」がある。この「魏志倭人伝」の直前に、朝鮮半島南部の「弁辰」と呼ぶ韓人の土地が鉄の産地であって、倭人もここで鉄を入手していることが記載されている。鉄は韓人から倭人に供給されていた。、、、弥生時代、倭人が使用した鉄器はまず朝鮮半島から製品として搬入された。それには鑄造と鍛造のどちらもある。搬入された厚い鉄板状の素材を材料として、鍛造で製品をつくるようになったのは、遅くとも前2世紀ごろからのこと。鉄の製品は、工具であり、農具であって、生産活動に不可欠のものだった。』と書いて、5世紀までの日本では鉄の製錬が行われておらず、弥生時代には鉄素材を大陸から得て、それを加工したとしています。

その考え方に対し、村上恭通氏は『倭人と鉄の考古学』の中で、広島県の^{こまる}小丸遺跡で弥生後期と見られる円筒形竪型炉(シャフト炉)が出土している事や、中部九州で、朝鮮半島では使用されていない菱鉄鉾や褐鉄鉾を原料とする鉄器が見つまっている事等をあげて、必ずしもそう言い切れないとしていますし、真弓常忠氏も、『古代の鉄と神々』の中で、吉野裕氏が、島根県八雲郡八雲村の「金屑山」の谷間で、弥生時代中期のタタラ炉の跡が見つかった事(1970年)や、又、松江市西忌部町柳原の標高200Mの花崗岩中から弥生時代末期の溶鉄炉跡が見つかったと述べている事を引用して、弥生時代に、日本で鉄製錬が始まっていた事を力説しています。

同様に、文献上の考察に留まらず、実際に昔の鉄素材を使い、同じ作り方を試みて、鉄を作る事を実証した事例は少なからずあります。例えば、ホームページ『金生山明星輪寺』を開くと、美濃刀で有名な関市の刀匠大野兼正氏が当時の材料と方法で^{とうす}刀子を作った事例を知る事が出来ます。大野氏は、岐阜県の赤坂山(金生山)で採れる赤鉄鉾を使用し、野だたらを作って^{けら}鉾を取り、それを鍛造しています。その鍛造が、その赤鉄鉾の砒素含有量の関係で難しかったらしく、何度も失敗していますが、鍛造に適切な温度が1150°C-1180°Cのごくわずかな範囲にある事を、試行錯誤の結果、最後に突き止めて、当時の^{とうす}刀子を再現しています。

こうした考えに沿って、八女を見るなら、この地域一帯がベンガラ土の多い土地で、しかも、この地域内の川に繁茂する^{あし・よし}葦や^{かや}薦や茅と言った禾本科植物が多い土地であったとすれば、ベンガラ土が褐鉄鉾になったのは、星野川だけでなく、八女全域の河川でもあり得た事になります。八女は、はからずも“磐井戦争”によって、当時、北部九州で政治の中心であった事が分かりますが、その背景は、そうした鉄を得られた事が、政治、ひいては経済の中心になりえた理由であったと想定出来るかもしれません。



童男山古墳の鉄鏃/鎧片(6世紀)

ところで、冒頭、童男山古墳の主達がその褐鉄鉋を利用して、あたかも鉄を作った可能性があるかのように書きましたが、童男山古墳の主は 6 世紀後半以降の人ですから、その人達より 400-500-年前の、弥生時代後期の西山ノ上遺跡の人々が、そうした褐鉄鉋による鍛冶を始めたと思定するのもあながち的外れでない事になるになります。他方、童男山古墳の主達が鉄を作ったとすれば、その褐鉄鉋を利用したと特定するより、付近で採れる砂鉄も利用して鉄を作ったとする方が妥当性のある想定です。何故なら、6 世紀の鉄づくりは、弥生時代とは異なり、踏鞴を使った炉を用い、専用納具を使用しての専業工人集団による鉄作りの時代になるからです。

さて、八女でも弥生時代後期の環濠が発掘された訳ですが、弥生時代の代表的な環濠集落といえは、“吉野ヶ里遺跡”であり、その吉野ヶ里と八女の環濠集落の関連性について押さえておかななくてはなりません。

吉野ヶ里遺跡は、佐賀県^{かんざき} 神埼 郡神埼町にあり、八女とは筑後川を挟んで反対側に位置する所にあり、背振山地と佐賀平野の間の丘陵にある弥生時代の日本最大規模の環濠集落です。これまでの発掘では、^{きゅうしつ} 宮室・^{ろうかん} 楼観・城柵・高床式倉庫群跡が見つかり、魏志倭人伝に述べてある邪馬台国がイメージ出来る遺跡で、外濠の広さは、周囲約 2.5Km、25 ヘクタールの広さで、溝巾は 6-8m に及びます。

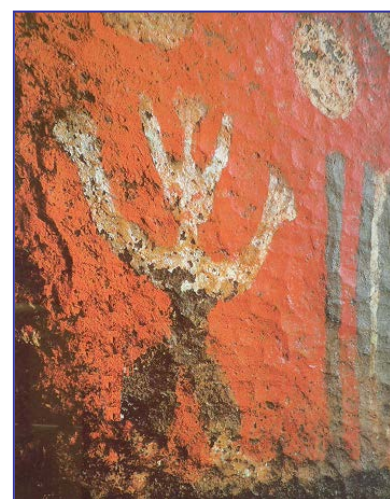
吉野ヶ里では、現在、弥生時代の中後期(前 1 世紀—後 3 世紀)の環濠集落、及び弥生時代中期(前 1 世紀)の巨大な墳丘墓が発掘されています。その墳丘墓の甕棺は 2 千数百基に及び、そこから多数の人骨が出土していますが、その人骨について、金関丈夫氏は、日本列島在来の縄文時代人とは形質的特徴が異なり、身長が高く顔が長いなどの違いから、朝鮮半島から稲作文化を携えてきた渡来人の系譜としており、それは北部九州一円で認められる特徴であると述べています。

甕棺からの出土品としては、始祖王と思われる人の甕棺から朱に混じって十字柄の有柄銅剣や青ガラスの管玉等が出土しており、又、弥生時代前期(紀元前 2 世紀)にさかのぼる日本最古の銅矛・巴形銅器の鋳型や各時代各種の青銅器の鋳型が出土しています。

更に、環濠集落一帯からは、鉄製の鎌・斧・鋤先・矢じり等が多量に出土した事から、吉野ヶ里では、石器から鉄器への生産用具の切り替えが、いち早く行われた所と推定されています。

そうした吉野ヶ里遺跡の特徴を基に、八女・岡山の西山ノ上遺跡を考えると、規模の大小についてははともかく、その同時性が目に付きます。すなわち、環濠・鉄(鍛冶)・稲といった弥生時代を特徴づける指標は共通ですから、八女にその時代、同じような質の集落があったとしてもおかしく無い事になります。そして、実際、吉野ヶ里遺跡と同じような集落は、八女だけでなく他にも発掘されているのです。例えば、八女市を熊本県側に行くと、九州山地の山並みに入りますが、山々を越えると、山鹿市/及び菊池市がある盆地に出ます。そこには装飾古墳で有名な“チブサン古墳”に代表される古墳群があります。そのチブサン古墳は、冢形石棺の形式で内部は青・赤・白の“装飾”(右=山鹿市立博物館ポスターより部分転写)が施されており、その赤色の彩色に使われた顔料はベンガラとされています。(松田壽男氏は『日本の朱』で九州北/中部の多くの“彩色古墳”は朱砂に違いないと力説しています。)

尚、チブサン古墳は 6 世紀初期の前方後円墳で、磐井が活躍した時代に重なります。



6世紀に作られた古墳は数多く、オブサン古墳他がありますが、その世紀後半に馬具/騎馬の影響が現れるのが特徴です。

(ちなみに、装飾古墳は、八女に於いても弘化谷古墳等あり、童男山古墳、浦田古墳もそうだったと思われます。)

そして、留意したい事は、そこ菊池/山鹿には、吉野ヶ里遺跡と同時期の遺跡として、弥生時代後期から古墳時代前期(約1700



-1900年前)にかけて栄えた方保田東原^{かとうだひがしぼる}遺跡がある事です。その遺跡は菊池川と支流の方保田川に挟まれた35ヘクタールの大集落と見られており、巾8mの環濠、巴形銅器・鉄斧・石包丁形鉄器(上写真)、丹塗壺等が出土しており、現在も発掘中です。遺跡の大きさや環濠の巾から比較すれば、吉野ヶ里の大きさをしのぐ規模である事は充分想定され、今後の発掘が期待されます。

谷川健一氏は『青銅の神の足跡』で各地に残る蹴裂^{けきく}伝説を記し、その中に、阿蘇の話を載せています。それは、阿蘇の火口原は、昔、一面の湖水だったのですが、神八井耳命^{かみやいみみのみこと}の子供である龍神健磐竜命^{たけいわたつのみこと}が立野^{たての}にある数鹿流^{すがる}の滝を蹴透して、阿蘇湖を乾したと云う伝説です。『肥後国誌』には、熊本県の鹿本郡を中心とした玉名郡や菊池郡に及ぶ広大な一帯が、かつては水底で、そこは茂賀の浦と呼ばれていたとあります。そこに阿蘇大明神である健磐竜命が山鹿に来て、鍋田の岩を蹴透して湖の水を流したと云う話を紹介し、湖の水を有明海に導いた川が菊池川だと書いています。氏は、各地に残るこうした蹴裂^{けきく}伝説が鉄器を用いての開墾や開拓を暗示しているとし、阿蘇国造の祖神である健磐竜命がその阿蘇湖の干拓に係わった事が、この伝説を生んだとしています。

又、氏は、蹴裂伝説の他にも、山鹿市久原^{くぼる}に目一箇男神(天目一箇神^{あめのまひとつかみ})を奉る神社があり、しかも、その近くに銅山があった事を書いています。そして、『肥後国誌』巻之七には、その金属の神である目一箇男神が6世紀の継体大王時(磐井の時代でもあります)に震岳^{ゆるぎ}(別名高天山^{たかま})の主神として奉られている事を紹介しています。更に、地元の伝説にはその震岳にいた土蜘蛛^{たぐい}の類が景行大王(日本武尊の父)の軍勢に激しく抵抗したが、滅ぼされたという話がある事を指摘しています。

興味深い事に、村上恭通氏の『倭人と鉄の考古学』によれば、発掘による鍛冶工房跡は、当時の先進地域であった博多地区以上に、その菊池/山鹿地区に於いて発掘されています。つまり、弥生時代から古墳時代の移行期において、別の言い方をすれば、卑弥呼の時代において、鍛冶工房跡の遺跡が集中的に見られる所が阿蘇/菊池/山鹿地区と博多地区なのです。その事は、その鍛冶工房から産出された斧をもって山野を切り開き、U字形の鋤^{すき}先や鍬^{くわ}先の木製鋤鍬に付ける事で稲に代表される農作物を作り、鑿^{のみ}・鉋^{かん}で木々を加工して家や什器を作ると云った、鉄を核とした新しい質の生産基盤が、阿蘇/菊池/山鹿地区や博多地区を、当時の政治経済の中心地にしたと想定できます。とすれば、谷川の湯の浦に分祀されている阿蘇神社は、そうした背景の中、阿蘇に繋がる人々が“八女・谷川”にやってきた事を表しているのかもしれない。

そのように見てくると、八女や菊池/山鹿にあったベンガラが、吉野ヶ里地方にあったかどうかは、興味ある事柄です。(ちなみに、朱が吉野ヶ里の甕棺に残されていた事は既に言及の通りです。)又、先に見たように、魏志倭人伝には、邪馬台国には丹、すなわち、水銀朱が有ると書かれており、一歩下がって、丹がベンガラをも指すとしても、邪馬台国とその朱&ベンガラの繋がりを辿る事に加え、青銅や鉄の軌跡と朱やベンガラがどう繋がっているかを探求する事は、古代を知る上で大事な事と思われます。

それはさておき、古墳時代に主流になる、踏鞴を使用し製鉄を行う際にその原料となった、砂鉄の有無を見てみますと、菊池/山鹿は有数の砂鉄地帯で、そして、吉野ヶ里には、すぐ背後に背振山地が在り、そこも砂鉄が採れた事で有名でした。では、八女ではどうだったのでしょうか。

谷川から、山内^{やまうち}とは反対方向に丘一つ越えると多々良^{たたら}と呼ばれる集落が有ります。多々良は矢部川に合流する辺春川^{へばるかわ}沿いにあり、地形の関係で辺春川がカーブしている為、川の流れが緩み、砂が溜まる淀みが出来やすい場所です。多々良は、熊本方面に貫ける国道3号線上にありますが、同じく、大分への道でもあったようで、その古道にはめがね橋が今もあります。

そのめがね橋が架かる川が遠久谷川^{とおくだにがわ}(写真右)で、地元の人に依れば、昔は、雨が降るたびに川砂が真っ黒になった程、砂鉄が多く採れた川でした。多々良付近には花崗岩の岩肌があり、その花崗岩に砂鉄が含まれていますので、川が真っ黒くなった程の砂鉄はその花崗岩が風化して得られたと想定できます。又、多々良の背後は山林ですから、精錬にあたって必要となる大量の炭についての心配が無く、更に川水の利便性を得られるその地は“たたら製鉄”にとって、格好の土地だったのです。

ちなみに、その多々良に、高良大社の分祀が奉ってある事は、“多々良”が重要で所であった事を補完する傍証と言えます。



めがね橋下と遠久谷川

その多々良の北側のすぐ裏に6世紀後半とされる浦田古墳があり、そこから、鉄器・須恵器・土師器が出土しています。その横穴式石室は開口しており、中を見る事ができます。訪ねると、何故、こんな見通しが悪く、狭く不便な所に古墳をわざわざ作ったのだろうと誰しも思う位、一見何のメリット無い山奥に、それは作られています。しかし、その横に岩肌の大きく露出した花崗岩塊を見れば、その疑問は氷解します。そうです、浦田古墳に眠る主は、砂鉄の山に抱かれて眠っていたのです。おそらく、その主は、花崗岩の砂鉄を独占支配し、砂鉄を独占する事で古墳を残す富と力を得たと想像できます。しかし、古墳は辺春川に面した陽光の指す多々良に作っても良かったのに、山奥で猫の額ほどの狭い所に作った訳は、よほどのほれ込みがあった事によるものか、或いは、その花崗岩脈を守護した人で、砂鉄を供給するだけの役職だった事に依るものかもしれません。

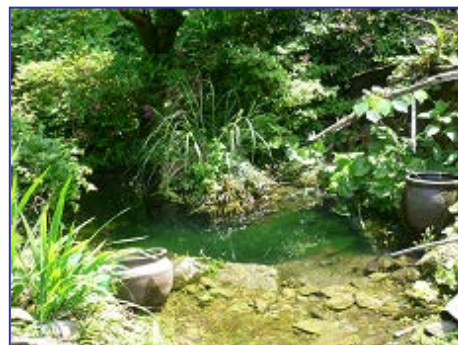


浦田古墳(入り口)



さて、その多々良には辺春川に合流する川に遠久谷川があり、その川は砂鉄がたくさん採れた川だったと既に述べましたが、その川の源流に遠久谷の集落があり、その一角に“金糞谷^{かなくそだに}”と呼ばれる地名があるのです。その“カナクソ”とは、昔、製錬場で精錬した際に出来る不純物の塊をそう言った訳ですが、その金糞を捨てた事から付けられたと思われる地名が、遠久谷集落に向かう途上の山間にあり、その沢一帯を、今もそう呼んでいるのです。

その沢を峯の途中まで登って行くと、泉がある所に行き着きます(右写真)。車から降りて回りの岩肌を見れば一帯は先程の花崗岩の岩肌で、確かに、砂鉄の採取には絶好の場所です。しかも、沢全体が北西の風が下から上にあがってくるのに調度良い方角に向いており、もし、製錬を冬に行うとすれば、強い北風が^{ふいご} 鞴の代わりになりえる、もってこいの地形です。それに加えて、そこには、製錬に不可欠な砂鉄原料、炉を焚くに十分な木材・炭、そして溶けた鉄を任意に操作する水が得られる泉があるのです。



しかし、残念ながら、岩場の花崗岩帯の存在は目で確認出来たとは云え、回りは一面草木で覆われ、しかも、地元の人でさえ、何故にそこがカナクソ谷と呼ばれるのか解らなくなっているように、何の言い伝えも残っていません。



このように、鉄の精錬が行われたかどうかの確証は得られません。が、しかし、そこで鉄を作ったとしてもおかしく無い場所である事は確かです。

次に、見ておきたいのは、「^{たにがわ} 谷川」の地名です。興味深い事に、谷川のすぐ東隣に「^{たがた} 田形」と呼ばれる地名が、矢部川沿いにあるのです。

谷川健一氏は、『日本の地名』『白鳥伝説』の中で、そこで“壺石”(別名、“^{すずいし} 鈴石”“^{たかしこぞう} 高師小僧”)と呼ばれた褐鉄鉱がよく出た大阪府泉南郡岬町(和泉国日根郡鳥取郷)に言及し、そこに残る地名の多奈川や谷川が、『土佐日記』には「^{たなかわ} 田無かは」と書かれ、もとは谷川と記されていたと述べています。又、吉田東伍氏の『地名辞書』では、その地区が古くから「^{たなかわ} たな」と呼ばれており、それは「^{たなかわ} 桁川」の地名に由来したとしています。そしてその「^{たなかわ} たな」は“^{たなかわ} 桁”(『けた』と辞書には出ますが『たな』と読みます)で、その“^{たなかわ} 桁”は、“^{かぬちな} 鍛名”から、つまり鍛冶を意味する“^{たな} 鍛名”から関連づけられた名で、故に、日本書紀には「^{たな} 鍛名川」と書かれたと指摘しています。

とすれば、立花町の谷川も田形も、その“^{たな} 鍛名”の意から付けられた地名なのかもしれません。その考えに沿うと、谷川にある^{じしゆ} 地主神社の地名は、「湯の浦」と呼ばれていますが、その意味は、“湯”の字が温泉や泉を意味する湯の意ではなく、鉄を溶かす“^{たな} 炉”が溶ける様の事を指す“湯”であり、“浦”は“裏”であると解釈すると、“湯の浦”の地名は、“^{たな} 炉の裏側”に位置した事から付けられた地名と推測する事はあながち的外れで無い事になります。又、そう解釈すると、丘陵に湯の字が何故に付けられたのかが、関連付けて理解できる事になります。

そして、谷川から東に丘陵を一つ越えた多々良も^{たたら} 踏鞴があった事から付けられた地名とすれば、谷川/田形/多々良地区は八女に於いて鉄を作った中心地だった事になります。或いは、星野川をはさんだ山内もそうだったのかもしれませんが。

更に、それ故にこそ、728年に行基が開いたとされる^{こくせんじ} 谷川寺(右写真)に僧坊が何十もあって繁栄したと云う地元の言い伝えは、そうした製鉄に従事した人達の寄進によって可能であったと推定すれば、その言い伝えは、決して根拠の無い話では無かった事になります。



八女市吉田にある岩戸山歴史資料館に行くと、八女地区が古墳の宝庫である事がわかります。それは、5-6世紀にかけての古墳が八女丘陵の東西10数kmに150-300基の古墳が確認されているからですが、この他にも^{とびかたやま}飛形山で蜜柑畑造成の際に古墳を随分壊したという話もあるとの事ですから、八女丘陵に限らず、そうした古墳を含めれば、この八女は古代の政治経済上、重要な地域であつたに違いありません。何故なら、6世紀の“磐井戦争”の際、筑紫君^{ちくしのきみ}磐井は継体大王の派遣した物部^{あらかび}麁鹿火と戦って負けますが、その際に、磐井の子供である^{くずこ}葛子が糟屋^{かすやのみやけ}屯倉を継体大王に差し出した事で助命されている事柄に如実に表れているからです。その事は、八女に本拠を置く筑紫君が玄界灘の志賀島までを支配領域にしていた事を示しており、又、磐井は、その時、火の国(熊本/佐賀/長崎)・豊の国(大分/福岡一部)を支配していたと云われています。更に、新羅と呼応して継体側と戦った事は、九州と半島の交流が密接にあつた事を意味しています。

資料館の展示物を見れば、その時代、八女に先進文化をもった渡来人がやってきた事がよく理解でき、騎馬文化を背景に、金属や紙・養蚕等あらゆる技術をもってやってきたと捉えるのが妥当と思われる。

筑紫君磐井の主神社は^{こうらたいしや}高良大社(高麗行宮)であつた事が知られていますが、そうであれば、磐井は高麗の出自かその系譜、或いは、“磐井戦争”で新羅と協力しましたから、新羅の系譜である事を示唆しているのかもしれない。又、立山古墳から出た金製垂飾付耳飾り(右写真)が新羅製と見られている事は、その古墳の主は新羅が出自である事を示していると云えそうです。



そうです、吉野ヶ里の項で、金関氏が北部九州一円は渡来人に依って、先進文化が持ち込まれ形成されていったとの見方を紹介しましたが、北部九州だけでなく、日本全体に、何百年に亘って、人々は次々にやって来たのです。そして、やって来ては、支配・同化を繰り返し、又、日本に住んだ人々(倭人)も自由に海を行き交いました。そうした繰り返しを経て、6-7世紀になり、やがて徐々に“日本”としてのまとまりが形作られて行つたと解釈した方が日本の歴史をより正しく見る事が出来るのではないのでしょうか。

それはともかく、いつの世であれ、権力者の繁栄は、経済的なバックボーン^{バックボーン}の裏づけがあつてこそ、はじめて、内実を持つものです。とするなら、磐井のお膝元の八女で、その政治/経済の内実を具体的に支えたものは、ベンガラである“丹”にあつたのかもしれない。とは言え、谷川/田形/多々良地区の“踏鞴製鉄”が実際にあつたとしても、それが磐井の活躍した6世紀始めには既にあつたものか、或いは、磐井の後の、童男山の主の時代頃に始まるのかは、今後の発掘と研究に待つ他はありません。“過去”は、伝承の中と土の下に、今、静かに眠っています。



別区の石像
(首にベンガラ/朱の着色)



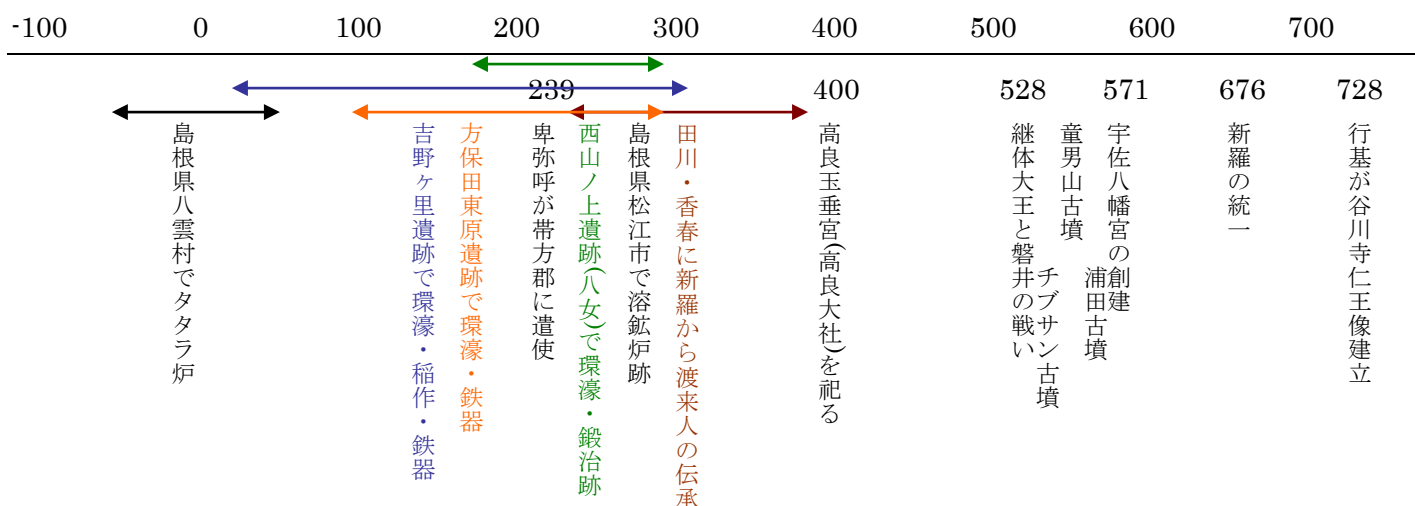
騎馬服装男と馬の埴輪



鉄製の短甲
(真浄寺古墳)



岩戸山古墳の赤い土



後記(その1): 吉田東伍氏の『地名辞書』には、八女郡は明治29年に上妻・下妻両郡を合わせて八女郡を復したとしており、その事から、明治時代まで、八女郡は両郡に分かれて、そのように呼ばれていた事が解ります。又、この“八女”の表記については、旧くは陽咩と書いたとし、上・下陽咩郡にわかれ、和銅年間(708-714)に上妻・下妻両郡表記になったと書かれています。又、『和名称』には上妻を「加牟豆万」と表記し、下妻を「下豆万」と表記したとありますから、八女は、古くから上下に分かれていた訳です。何故でしょうか。何か理由があったはずですが、、、

尚、矢部川や矢部山の“矢部”については、“八女”の訛ったものとしています。

後記(その2): 阿蘇には、“阿蘇黄土”と呼ばれる褐鉄鉱を露天掘りで採掘している会社が、今も操業しています。その阿蘇黄土は、昔、阿蘇谷が湖であった頃に岩石中の鉄分が堆積して出来たとされ、弥生時代の舟の櫂や木鋤が出土しています。又、その黄土を焼いてベンガラを作り、石棺に塗った古墳(中通古墳)が有りますので、古くから、黄土の有用性を知り、使用していた事がわかります。ちなみに、阿蘇黄土は、現在、大都市のし尿処理施設で硫化水素の吸着剤として大量に使われている他、豚の貧血防止用の鉄分補給剤として飼料に混ぜて使われています。

後記(その3): 谷川健一氏は、『青銅の神の足跡』の本中で、神八井耳命が多氏の祖である事を述べ、その父が神武帝、母がヒメタタライスズヒメ(媛蹈鞰五十鈴媛命)、そして弟が神湊名川耳命であると記しています。これから、母と弟の名前に、“たたら”と“ぬな”の字が付いている事を知る事ができます。古代の神様は、そうです、金属に纏わる神様が以外と多いのです、又、多氏は、安曇氏に繋がる、鉄に纏わる氏族で、阿蘇氏もその同族であると述べています。そして、多氏については、八女郡広川町太田にあった太田郷と何らかの関連があるはずなのですが、、、

後記(その4): 徐福伝説が、童男山古墳のある八女市山内にあります。徐福は秦の時代ですから紀元前3世紀の話ですから、童男山古墳の6世紀とは800年程も時間が異なりますので、直接的な関連は考えられませんが、ともあれ、八女に徐福伝説があるのは、興味深い事柄です。又、吉野ヶ里のすぐ近くの佐賀郡諸富町にも同じ徐福伝説が伝えられている事も留意されちよい事柄です。しかし、徐福を始め3千人程の一行が中国の先進技術をもって日本に来たとすれば、紀元前3世紀の古代日本は大きく変わったと思われるのですが、その軌跡



の跡を具体的に確認できないのがもどかしい処です。

後記(その4)：『日本残酷物語』第2部の「消えていく山民」に、“墓標なき人々”の章で次のような記述があり、情景が重なると考え、書き写します。文中では、こうした銅鉄採取のはなはだしかった時代は中世から近世にかけてと書かれています。が、このレポートで見たようにそのきざしは、既に6世紀には少なくとも始まっていた事が、推定出来るのではないかと思います。

『備中(岡山県)から西、、、石見(島根県)にかけて、中国山脈の谷々や小さな盆地の周辺には、山を削り取って骸骨ばかりになったような丘がいくつも重なりあって、そこを草がおおっているような風景を見ることがすくなくない。(段替)そこはたいてい砂鉄をとったあとである。もともとはふっくりした山であったと思われるがこれらの丘陵は花崗岩から成っており、その花崗岩には多くの砂鉄を含んでいたから、掘りくずして行って砂の中から砂鉄をとり、岩質が出てくると放棄して他へ移っていったものである。こうして丘陵をくずし、砂の中から砂鉄をとる作業を鉄穴掘りといった。砂の中から砂鉄をよりわけするには、ながいミゾをつくってそこへ水を流し、水に砂や小石をはこばせて、その砂や石を途中でとりのぞきながら、砂鉄を沈殿地に沈殿させる - この作業を鉄穴流しとよび、砂鉄をコガネといった。、、、こうしてとった砂鉄は製錬を必要とし、製錬には木炭を用い、タタラを利用して風を送ってコガネを溶解し、ズク(銑鉄)を得たのである。このタタラを分で風を送る作業は、鉄穴掘りよりさらにはげしい労働で、百姓のかたわれではとてもできる仕事ではなく、はやくから専門化しており、これにしたがうものをタタラ者とか山内者とかいっていた。、、、このタタラは多くの場合燃料の得やすいところにおかれ、燃料の原木をきりつくしてしまうと、他に移っていくことが多く、定住はほとんど見られなかった。、、、

[記：2006年09月13日] 川添 洋

